

## 第11回ふるさと自慢写真コンクール 講評

### 『弁天島と那智の山々』

手前の海、中景の山、後景の畳々たる連山。熊野の奥ゆきを感じさせる作品で赤い鳥居が作品全体を引き締めている。那智山の濃い山並みが、弁天島の峻巖なフォルムによって幾分和らいで見え、それが美しい濃淡を生みだしている。ともに信仰の対象であった両者に抱かれるように、祈りの海・那智湾があることも、この写真は教えてくれる。

### 『色川の鏡田』

紀伊半島は耕作地が極端に少ない。それは山が海に迫るように迫り出すこの土地の地形ゆえ。だがここにも稲作の営みが細々と、しかし力強く生きていることを物語る写真。山の瀬から射す光の豊かさを棚田の水面が鮮やかに映し出している。

### 『マグロの町の伊勢エビ漁』

手前下一面に刺し網を廃し、また中央に網からイセエビをはずす男性を配し、海と漁業施設の構図もいい。豊穡の海の恵みへの「感謝」と「忙中閑あり」を感じさせる作品です。

### 『祖父より孫へ』

夏の昼下がりのたわいのない時間を切り取った一枚。ただ、そのたわいなさが見る者に多くのことを想起させるように思う。私にはこのあと2人が家に帰って一緒にそうめんをすすり、縁側でスイカを食べる風景が浮かぶ。